

自己肯定感を育み、夢を実現するキャリア教育の実践

学校名	立命館宇治高等学校
所在地	〒611-0031 京都府宇治市広野町八軒屋谷33番1
学級数	30
児童・生徒数	1172名
職員数/会員数	110名
学校長	汐崎 澄夫
研究代表者	酒井 淳平
ホームページ アドレス	http://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc



1. はじめに

平成20年12月の文部科学大臣から中央教育審議会への諮問を受けて「キャリア教育・職業教育特別部会」が発足し、現在も審議が重ねられている。現在、キャリア教育は国の大きな教育課題として認識されている。本校は大学附属校であり、受験に縛られないからこそ将来のことを考えた学びができ、「生き方」そのものの教育が実践できる環境にある。これはまさにキャリア教育であり、こうした問題意識から2008年度に「キャリア教育部」を立ち上げ実践をすすめている。

2. 研究の目的

本研究の目標はキャリア教育の一環として「①生徒の夢を育てること」、「②生徒の自己肯定感を高めること」の2点である。①は意欲的な一部の生徒を対象とした取り組みであり、②は高1の全生徒を対象とした取り組みとする。

イベント型の取り組みで今年度だけ実施するものではなく、本研究の取り組みが来年度以降も学校のキャリア教育として実践していけるようにする（成果を残し認めてもらう）ことも大きな目標である。

3. 研究の方法

生徒の夢を育てる取り組みとして「夢プランコンテスト」を実施した。社会貢献につながるもので、自分が高校在学中にぜひやってみたいと思う夢を全生徒から公募し、応募され

た夢から学校として応援するものを一つ選び、応援した。一人の夢にとどまることなく多くの生徒に広がるよう、夢を全生徒にプレゼンして一緒に活動するメンバーを募る機会や、活動報告をする機会も設定した。

生徒の自己肯定感を高める取り組みとしては、10年以上前から実施されている施設（地元の保育園、小学校、老人ホーム）でのボランティア体験学習に注目し、その事前学習・事後学習をきっちり設定し、その中で生徒の自己肯定感を意識的に高める時間（生徒同士で活動をふりかえる、生徒同士でお互いのよかったところを伝えあうなど）をプログラム化した。この取り組みについては生徒の様子やレポートなどから判断するだけでなく、アンケートを実施することでその効果を数値でも測定した。事前学習・事後学習のプログラム策定にあたっては、立命館大学サービスラーニングセンターの実践を視察し、助言もお願いした。また、ボランティア体験学習をより充実させるため、Webを用いて本校生徒のメッセージを受け入れ施設にタイムリーに届ける方法も検討した。

なお上記2つの実践はいずれも、Webを用いて学内外に発信をし、資料（配布プリント、映像など）はすべて学内のサーバーに蓄積またはDVD化した。

4. 研究の内容と経過

(1) 夢プランコンテスト

6月に夢プランコンテストを実施。当初反応が少なく心配だったが、最終的にグループ・個人あわせて50人以上の生徒が夢を応募した。校長、副校長を含む審査員との面接をへて最終的には「高校生による国際貢献活動」を学校として応

援する夢に決定した。

一人がはじめた夢だったが、その後「Dig Future Project」と名前をつけ、メンバーを増やしながら、本校文化祭や立命館大学のベースボールクリスマスでの募金活動、大久保駅での街頭募金などを実施した。

また9月には活動紹介プレゼン、1月～2月にかけては活動報告会を高校生全体に対して実施し、夢を多くの生徒へ広げる活動を行った。

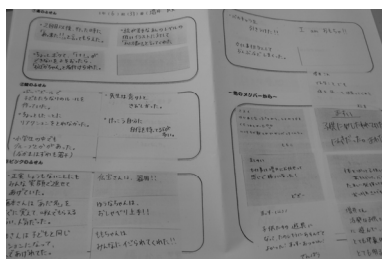
この活動は産経新聞にも取り上げられ、新聞で活動を知った方が募金を届けてくださるというサプライズもあった。



(ベースボールクリスマス前夜祭での活動紹介)

(2) ボランティア体験学習

本校では高1全員を対象としたボランティア体験学習は10年以上実施されているが、事前学習は不十分であり、事後学習は実施していなかった。そこで事前学習を「活動の目標設定」「体験学習の意義や注意点を徹底して伝える」「同じ施設に行く生徒同士での人間関係作り」、事後学習を「活動を終えて成長した自分に気がつく」「施設へお礼の気持ちを伝える」とねらいを明確に設定し、そのねらいを達成する3時間分の指導案を作成し、実践した。本校では生徒全体を4つのグループにわけて体験学習に参加させているため、事前学習・事後学習とも試行錯誤しながら4回実施することができた。その成果については、生徒の様子、レポートだけでなく、アンケートによる数値評価や受け入れ施設からの生徒の活動についての感想も指標とした。



(↑事後学習で使用したワークシート)

5. 研究の成果と今後の課題

(1) 夢プランコンテスト



1人からはじまった夢だったが、「Dig Future Project」チームを結成し、40人近いメンバーで25万円を超える募金を集め、カンボジアに井戸を10基提供できるところにまで成長した。

井戸の提供やこの取り組みを通して関わった生徒たちが大きく成長したことも大きな成果ではあるが、それ以上に学校全体にその夢が広がったことが大きい。たとえば9月に進路講演会のあついで、活動紹介プレゼンをしたが、そのプレゼンを聞いて20人以上の生徒が活動に参加し、その生徒たちが

ベースボールクリスマスや街頭募金に参加した。1月から2月にかけて活動報告会を実施したが、「こういうことを思うよりも実際に行動できるのがすごい、自分も頑張って行動したい」「何か心が動かされた」という感想を多くの生徒が書いていた。教員からも「生徒の“生き方”にまで迫ったいい発表だった」「このような先輩がいることに高校生は感動と誇りを持ったと思います。志をどう受け継ぐかも考えさせていきたい」と大変前向きな意見をいただくことができた。実際に活動に参加した生徒、活動を聞いて励まされた生徒など受け止め方に違いはあるが、最終的に本校の全生徒の心に残り、夢を広げる取り組みになった。その後教員にも活動報告を実施し、まさに学校全体に夢を広げる取り組みになった。

また、生徒の夢を産経新聞に取り上げてもらえたことで、その記事を読んだ方が募金を届けてくださるなどのサプライズもあった。

なお今年度の成果を受け、夢プランコンテストは来年度以降も継続実施できる見通しである。



(Dig Future Project ミーティングの様子)

(2) ボランティア体験学習

「今回が最後だと保育園の先生が子どもたちに言ったとき、子どもたちがすごくがっかりしていました。その姿を見て一緒に遊んで楽しかったんだと思いました。子どもたちがお別れに歌を歌ってくれました。もうお別れだと思うと少し寂しかったです。この体験学習は僕にとってすごくプラスになりました。」(生徒のレポートから)

多くの生徒はまとめとしてこのように、自分のことを待っている人がいたことに対する喜びや、終わるときの寂しさ、この体験学習の良さを書いていました。引率の先生からは、活動のはじめに「事前学習」として態度やマナー面だけでなく、目標設定をさせ、人間関係作りをしているのがプラスに働いているという意見を多数もらった。今回の実践によって確実に体験学習がよりよいものになったことがわかる。



(デイサービスセンターでの活動から)

* 生徒のアンケート評価

<事前学習>

「今日の学習で体験学習のイメージは高まりましたか？」

Yes	No	どちらとも
94%	0%	6%

「今日の学習で体験学習の意欲は高まりましたか？」

Yes	No	どちらとも
95%	0%	5%

(多かった感想)

「体験学習へのイメージが高まったし、頑張ろうと思った。」

「今日、もしも事前学習の授業がなかったらあいさつや集団行動に気を配れなかったかもしれない。立宇治の看板を背負って行くことを忘れずにいい体験学習にしたい。」

「同じ施設に行く人には知らない人も多いので、仲良くなれてよかった。一緒に頑張りたい」

<事後学習>

① 体験学習は有意義でしたか？

(大変有意義～ぜんぜん有意義でないの5段階)

大変有意義	まあ有意義	どちらでもない、あまり有意義でない
63%	32%	5%

⇒ 全体を4つのグループに分けて体験学習を実施しているが、後半のグループになればなるほど、「大変有意義」と答える生徒が増加していた。これは学校と各施設の関係が深まる中で、よりよい活動ができた結果であろう。

② 体験学習を終えて、自分のいいところに気がつきましたか？(3段階)

気がついた	気がついていない	わからない
66%	5%	29%

③ 体験学習を終えて、以前より自分のことを認められるようになりましたか？

認められるようになった	認められなくなった	わからない
55%	0.5%	44.5%

⇒ 自分の良さを知ること、自己肯定感を高めることについて、一定の成果があったことがわかる。また、学年作りや学級作りという視点からは人間関係作りという点でも意義の大きい取り組みであった。以下のアンケートからもそれはわかる。

④ 体験学習を終えて、まわりの友人のいいところに気がつきましたか？(3段階)

気がついた	気がついていない	わからない
97%	1%	2%

*受け入れ施設からの反応

1年の終わりに今年度のお礼を伝え、来年度の受け入れ依頼をするが、そのときの反応に生徒の活動の様子が直接反映される。今年度は特にいい反応が多く、一定の成果があったことを強く感じた。ほぼ全施設から「今年の生徒は特に頑張ってくれた。来年もぜひお願いします。みんな楽しみにしています」と言ってもらうことができた。これは1年前にはなかったことである。事後学習の中で各施設へのお礼も作成しているが、「(お礼として)いただいた手紙を子どもがすごく喜んで読んでいました」など言ってくれる施設も多かった。この実践も、来年度以降継続実践できる見通しである。

また、本研究の成果として、上記(1)(2)の実践を含んだ「キャリア教育部のページ」を学校のホームページ内に開設

することができ、学校内外への発信ができるようになったこともつけ加えておく。

(<http://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc/>から「キャリア教育」のボタンをクリックすれば見れる)

(3) 今後の課題

上記(1)(2)の取り組みは確かに大きな成果があったが、今年だけのイベント的な取り組みではなく、学校の教育プログラムとして継続することが大切である。また、何かの取り組みのあとで、その都度生徒に成長を確認させ、記録として残していくことでより教育効果が高まり、生徒も成長が実感できる。これは教員の立場に立てば、学年を担当する教員がかわっても一定の実践を行えるということになる。そこで生徒の成長を記録するものとして、また本校のキャリア教育の土台となるものとしての「6年間を見通したプロフィールファイル」の作成も本研究の一環として実践しようと試みた。これは議論を開始する段階までで終わり、完成と実践は来年度の課題として残った。また、夢プランコンテストのような取り組みに反応する生徒を増やす取り組み、言いかえれば生徒の夢そのものを育てる取り組みの必要性も明らかになった。こうした課題については研究助成は終わるが、来年度実践できるよう準備を始めている。

当初予定していた受け入れ施設と生徒とのリアルタイム(体験学習以外の日)のやりとりであるが、パスワードを設定してのホームページ立ち上げまでの作業はできたものの最終的に断念した。これは、個人情報の問題と、受け入れ先施設でのPC環境の問題が大きかった。どのように生徒と受け入れ施設とをよりリアルタイムにつなげるかも残された課題である。

6. おわりに

助成研究というチャンスを与えていただきありがとうございました。

夢を育てる夢プランコンテスト、自己肯定感を育む土曜講座の実践はともに来年度以降も実施できるようになった。これはパナソニック財団の研究助成があり、実践してみるという一歩を踏み出すことができたから実現したことである。また生徒が夢の実現へ頑張っていく姿には教員も勇気づけられた。今後は6年間を見通したプロフィールファイルの作成とファイルを活用した実践をし、それをベースに学校として6年間体系立てたキャリア教育を実践していきたい。学んだすべての生徒が夢を育てて大学、社会へと巣立っていけるような学校になるよう、これからも実践を重ねていきたい。

参考文献

「いのちにふれる授業-鳥取・赤碓高校の取り組み」高塚人志著、小学校(2004年)

「10歳からの夢をかなえるノート-キミだけのドリームツリーを育てて夢をかなえよう」ドリームツリープロジェクト編、学習研究社(2008年)